

昔にふれる・感じる！ 別海町郷土資料館

昔体験セット



別海町郷土資料館では、所蔵している資料の有効的活用を図るため、可能な限り貸出を行い、郷土学習に役立ててもらっています。

しかし、ただ単に見たり、使用方法を聞くだけでは、その資料に対する認識も浅く、印象に残らない実態があります。

こうしたことから、実際に資料を使用させることにより、昔の道具に対する理解、関心を深め、学習効果の向上が期待されると考えています。

特に小学校 3、4 年生社会の「昔の暮らし」等の「昔の道具を調べる」に対応したものとなっており、より効果的な学習のために「昔体験セット」をご活用いただきたいと思います。

○昔体験セットの内容（写真↑）

火鉢-1、火ばし-1、火消壺-1、火のし-1、炭火アイロン-1、湯たんぽ（陶器製）-1、湯たんぽ（亜鉛鉄板製）-1、せんべい焼き器-2、石油ランプ（カンテラ型）-1、石油ランプ（吊型）-1

○補助道具（写真→）

ガスバーナー-1、炭-1、火バサミ-1、カップ-2、ロート-1、布-2、アイロン台-1

○用意してもらう物

軍手・水を入れたバケツ（緊急時に使用するため）



○「昔体験セット」を使い、より効果的な学習をするために

①別海町の電気の整備状況を知る。

昭和 23 年（1948）に西別駅、現在の別海市街にあった駅にはじめて引かれました。その後町内全域に整備されるのは、昭和 40 年（1965）です。各地域ごとに整備の状況は違うと思いますが、電化製品が町内全域で使えるようになった年代が特定されると、それまでは「昔体験セット」の道具などを使用していたと考えられる訳です。ちなみに水道は昭和 42 年（1967）に引かれ始め、昭和 57 年（1982）に町内全域に整備されました。

②資料（道具）を知る。

より安全に楽しく使用いただくためには、道具の特性を知らなければなりません。「昔体験セット」は、火、熱湯、灯油など使用しますので、取扱には充分ご注意ください。また、不具合が生じましたらご使用は直ちにおやめください。

また、活用するにあたり、2 人以上の職員（大人）を付け、打ち合わせを充分に行い使用ください。郷土資料館職員が出向いて実践することも可能ですので、遠慮なく申し付けください。

③「昔体験セット」資料説明



・火鉢（陶磁器製）

中に灰を敷き炭を入れ、炭火をおこして手を温めるための暖房具です。五徳（ごとく）を立てて鉄瓶や薬缶（やかん）をかけ湯茶を沸かししたり、網を置いて餅や魚を焼くためにも使用されました。座敷の装飾品としても活躍しています。土製・木製・金属製（鉄・銅・青銅など）・陶器製など多様にわたり、江戸時代から明治にかけて陶器が発達してくると次第に庶民の間に普及しました。明治中期以降になると炭焼き技術の普及で炭が容易に手に入り、火鉢の使用は一段と増えました。

部屋を暖めるだけの火力はなく近づいて身体を温める程度ですが、囲炉裏とちがい煙が出ず、また持ち運びや、夏場は収納することができ、石油ストーブが普及する昭和 40 年（1965）年頃まで冬の必需品として活躍しました。五徳…囲炉裏や火鉢の中に置き、釜や薬缶などをかけるための輪型の道具で、3 脚か 4 脚、鉄または陶器でできています。

・火ばし（火鉢のなか） 炭火などをはさむときに利用する金属製のはしです



・火のし

炭火を入れて底を熱し、その熱で布のしわを伸ばすための道具で、裁縫後の仕上げにも使用されました。その多くは真鍮製で、柄の付いた底が平らな鍋状の形をしており、熱した底を布類にあてて使用しました。

・炭火アイロン



金属製で中に炭火を入れて底を熱し、その熱と本体の重さで布のしわをのばすためのアイロンで、側面下部に空気口、上部に煙突が付いており、炭火が消えないように空気調整する仕組みになっています。

明治になって西洋から伝わり広く普及しました。昭和30年代の電気アイロンの普及により、次第にその姿を消すこととなりました。

・せんべい焼き器

せんべいを焼く型です。



・火消壺

(写真→)

火がついている炭を途中で消すときに使うもので、陶器製です。



・湯たんぽ (写真左-陶器製・右-亜鉛鉄板製)



暖房器具の一つで、容器に湯を注ぎ栓をし、触れて暖をとったり、布団などに入れ主に足を暖めるほか、椅子の背もたれや足先において、足や腰をあたためることに使います。

日本には室町時代に入ったとされます。栃木県日光市の輪王寺に、徳川綱吉が使用したという犬型の湯たんぽが伝わっているそうです。古くは陶器製が主で、金属製のものが現れたのは大正期以降です。戦争中は金属が貴重となったため、陶器製のものが使われるようになりました。現在ではプラスチック

ク製のものが主流となっています。陶器製の湯たんぽは保温性が良く遠赤効果があるとされています。

・石油ランプ（写真左-カンテラ型、右-吊型）



石油用の灯火具です。石油を金属製またはガラス製の油壺に入れ、口には口金（くちがね）をつけ、灯芯を差し込み点火し、「ほや」（ガラス製の筒）をきせて燃えをよくし、かつ風で吹き消されるのを防いでいます。灯芯はねじで上下します。すすで汚れたほやの清掃は手の小さな子供の仕事でした。種類としては吊り下げるものと、据え置くものとがありました。日本に渡来

したのは万延元年（1860年）、林洞海が渡米した友人からもらい、臭水で点火したのが最初であるといわれています。慶応頃からしだいに普及し、その明るさを賞賛され、明治5年には家々で点火されました。現在でも電気が利用できない奥地の山小屋などでは現役で使われています。

④昔体験セット使用の流れなど



「火鉢」に炭を入れて、ガスバーナーで火をつける。
（大人が行ってください。）

必ず屋外で行ってください。中庭やベランダのある教室など。また、消火用具（消火器やバケツに水を入れておく）を準備し、以下の作業は必ず軍手を着用ください。



炭に火がついたら、「火ばし」か火ばさみで「火のし」に炭を入れる。（「火ばし」を児童に体験させる）





室内に移動し、アイロン台と布（自分のハンカチでもOK）を用意し、しわをのばす。（「火のし」を児童に体験させる。）※高温でさわるとやけどをしますので、受け渡し時は、特に注意すること。



「火のし」の残り炭を、「炭火アイロン」に入れる。必ず2人で作業してください。（児童に体験させる。）



「火のし」と同じ要領で「炭火アイロン」でしわをのばす。（児童に体験させる。）



「せんべい焼き」も体験できます。





使い終わった炭は、「火ばし」や火ばさみを使って「火消壺」に入れる。(児童に火の始末を体験させる)
 ※炭を入れた「火鉢」「火のし」「炭火アイロン」「せんべい焼き器」は、高温になっていますので、さわるとやけどしますので、最後まで気を抜かないで下さい。



湯たんぽは、亜鉛鉄板製と陶器製ともにコンテナに布を敷いて設置していますので、お湯を捨てる時
 意外は、取り出さないでください。お湯は70℃～75℃
 が適温といわれています。

亜鉛鉄板製の「湯たんぽ」の湯口にロートをさし、
 計量カップに1.2リットルの水を入れ、「湯たんぽ」
 に入れる。沸騰したお湯をやかんでわかし、「湯たん
 ぽ」入れてください。

陶器製の「湯たんぽ」は計量カップに0.8リット
 ルの水を入れたあと、沸騰したお湯を入れて、湯口
 に栓をください。これで70℃～75℃のお湯ができま
 す。



「湯たんぽ」をはさみ、イスを対面式に置き、靴を
 脱いで靴下で暖かさ
 を感じる。熱い場合
 は、布をかぶせてく
 ださい。(児童に体験
 させる。)





「ランプ」にライターなどで火をつけ、芯の長さを調整してください。煙が出ない長さが最適な状態です。暗幕か遮光カーテンのある教室が良いと思います。蛍光灯の灯りと「ランプ」だけの灯りを比較してください。（「ランプ」を持つのはおとなだけとしてください）。

蛍光灯を点けた場合



蛍光灯を消し「石油ランプ-カンテラ型」のみの灯り。



蛍光灯を消し「石油ランプ-吊型」のみの灯り。

火や熱湯を使いますので大変危険です。最善の注意を払ってご使用ください。